

りとにゅーす

No. 73 2016.4.1

図書館の情報を
携帯でチェック!!編集・発行 岡山理科大学図書館
〒700-0005 岡山市北区理大町1-1
<http://www.lib.ous.ac.jp>

捨てられない本

生物地球学部 学部長 西戸 裕嗣



新入生の皆様ご入学おめでとうございます。直ぐにオリエンテーションを受け科目登録もそこそこに授業が始まり、真新しい教科書を手にしワクワクしていることでしょう。部屋の本棚にはこれら教科書が並ぶこととなります。恐らく、受験勉強に使った参考書などは既に処分し、気に入った本は少ししか残っていないのでは。誰しも持っている本を整理するとき、捨てられない本が出てきます。そんな思い出の本を紹介します。

高校に入学し寮生活が始まり、親元から離れた開放感から、それまで好きだった化石採集にのめり込みました。近場は既に飽きてしまい、地学の先生に化石産地の情報を聞きに伺うようになります。野村松光（地質学会教育功労賞受賞）先生は立て板に水のごとく臨場感満点の話とともに、一冊の本を取り出し進化による形態の変化や種の特徴を説明してくれました。それが、鹿間時夫著「日本化石図譜」です。四周がすり切れた、硬い表紙の本でした。当然その本にあこがれ、図書館へ探しに訪れるのですが、いつも貸し出し中です。2週間の貸出期限が過ぎれば書架に戻るはずですが、無いのです。図書室のおばさんの話では、3・4人が順にいつも借りに来るとのこと。石キチの競争相手がいたのです。後に一緒に化石採集に行く仲間となります。野村先生にグチをこぼすと、古くて書き込みあってもよければと、表紙がすり切れた化石図譜を渡してくれました。改訂版ですが、1951年版とあり偶

然にも自分の生まれた年と一緒にした。阿波勝浦産三角貝や肥前有田町産ツリテラなどの古い記述は忘れられません。大切にしましたが、何度も読み返しているうちに、当然ボロボロになり表紙が外れバラバラになりました。表紙を貼り直し現在は実家の本棚に収まっています。引っ越しなどの時には、多くの本を処分してきましたが、どうしても捨てられない一冊です。

21号館3階の図書館に林原文庫があります。これは、旧林原株式会社から恐竜・古生物やゴビ砂漠に関係した図書が多数寄贈されたものです。恐竜ファンにとって、これは必見です。この文庫を何気なく見ていたとき「日本化石図譜」が目に入りました。感激しきりです。早速手に取ったものの、何かが違います。あまりにキレイなのです。この時初めて表紙の色が紺色なのを知りました。その隣には、後に改稿され大判になった新しい本が鎮座しています。そして、ずらりと並んだ恐竜に関する本をついつい見てしまいます。その中に、ゴビ砂漠で目の当たりにした光景そのままが載っているものなどを見つけ感心したり、砂漠でのサバイバル術、モンゴル犬など次々と本に手が伸び時間を忘れてしまいました。そうです、図書館で目的の本を探しているうちに、とんでもない本を開いて見入ってしまうことがあるのです。これが図書館での冒険だと思っています。是非、チャレンジしてみてください。

ドクショル講演会2015

平成27年11月8日(日) ドクショル講演会を、さかさパンダサイエンスプロダクション代表の中川律子先生を講師に招いて、学外者15名・学内者39名の計54名の参加者を得て行われました。「ドクショル講演会」は、読書週間にあわせて行う講演会で、今年度が2回目でした。

題名：よもう！あそぼう！かがくの本～科学の魅力を伝える読書活動～

◆第1部【講演】◆ 科学の本の読み聞かせの会「ほんとほんと」の紹介があり、その後は実際の読み聞かせの方法の説明がありました。続いて、エビングハウスの忘却曲線（人は1日後には約75%のことを忘れている）の話の後、実験・工作などを読み聞かせに組み合わせてより印象深く、参加者の記憶に残す方法などの説明がありました。

◆第2部【実演】◆ 「くうき」という本を例に、実際の読み聞かせの実演の後、「1リットルの牛乳パックの中の空気の重さは、A. 0グラム、B. 1円玉くらい、C. 小さいミカンくらいの中のどれ」というクイズを出して、参加者の興味を引くなど実際に行っていることも実演されました。（正解はB）



この他、小さい空気砲（ヤクルトの容器+ゴム風船）や長風船電話（紙コップ2つを細長いゴム風船でつないだもの）を参加者全員で組み立てたり、段ボール箱の空気砲の穴の形を参加者の要望にこたえたイラストの形（へびと□四つ）に切り抜いて実際に空気砲を発射してみたり、発射された水蒸気がどんな形になるかを見てみたり（どんな穴の形でもドーナツ型になるそうです）するといった空気に関する実演や、新聞紙ドームなどそのほかの空気に関する実演例などが紹介されました。

空気砲や長風船電話を組み立てた際には、小さい子供から、大学生、大人まで一生懸命に取り組んでおり、出来映えを講師の先生からほめられたりして、会場は盛り上がっていました。こうしたことで、忘却曲線に負けない記憶を皆植え付けられたことでしょうか。このような和気あいあいとした雰囲気の中、講演・実演が終了しました。

◆図書館クイズ記念品贈呈式◆ 講演の後には、事前にインターネットなどで行われていた毎年恒例の「図書館クイズ」の成績上位者への記念品贈呈式が行われ、出席していた学外の方9名に拍手の中、記念品が贈られました。

第9回ベストリーダー賞受賞者



ベストリーダー賞とは、図書の貸出数上位者の1～3位を理工系、人文社会科学、文学の3分野において、1年生（新人賞）および4年生（大賞）を図書館長が表彰するものです。

2015年度は大賞9名、新人賞11名の計20名が表彰を受けました。

表彰	分野	順位	冊数	氏名
大賞	理工系	1位	553	高野 恵輔
		2位	529	森田 佑貴
		3位	340	杉田 健人
	人文・社会科学	1位	134	齋藤 法利
		2位	129	吉原 裕子
		3位	120	高野 恵輔
	文学	1位	615	廣本 拓也
		2位	270	宮岡 康二
		3位	245	松本 祥一
新人賞	理工系	1位	71	吉岡 建文
		2位	57	碓井 亮一
		3位	54	福田 浩司
	人文・社会科学	1位	37	柴田 博之
		1位	37	碓井 亮一
		2位	34	浅賀 透江
		3位	27	森光 司
		3位	27	大和田晃平
	文学	1位	195	横斗 優斗
		2位	143	奥谷 秀雄
		3位	125	安岡 駿人



プレ・クリスマス・スタディ2015



平成27年12月20日（日）、岡山理科大学21号館 3F 図書館で、小学生を対象に、プレ・クリスマス・スタディが開催されました。

●参加者 小学生13名、保護者の方9名

●13：00～14：00 （低学年）読み聞かせ、クイズ （高学年）2学期の復習

●14：10～15：30 （共 通）工作：牛乳パックのクリスマスツリー

※協力：岡山理科大学児童文化部

読み聞かせ

最初に、低学年の子供たちは、児童文化部による紙芝居です。



クイズ

続いて、20の扉という言葉を使うクイズです。最初は緊張していた子供たちも、やっているうちにどんどん白熱していきました。



2学期の復習

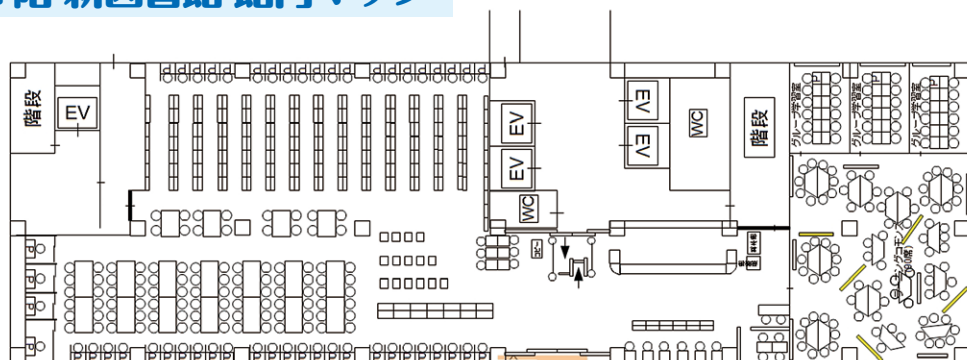
一方、高学年の子供たちは、理大のお兄さんと・お姉さんに見てもらいながら、2学期の復習です。



工作：牛乳パックのクリスマス・ツリー

休憩をした後、牛乳パックを材料に、クリスマス・ツリーを皆で作りました。マジックで色を塗ったり、イラストを書いたり、個性的なツリーができあがりました。

A1号館4階 新図書館 館内マップ



A1号館4階図書館は、平成28年4月にオープンしたばかりの図書館です。

平成28年度中に既存図書館から資料を移設するため、オープン当初は、閲覧室だけの利用となりますが、通常の閲覧席の他に、個人机約50席、グループ学習用にラーニングコモンズやグループ学習室も備えた図書館です。

ラウンジエリア(網掛け部分)では飲食可能です。是非利用して下さい。

→ A2号館図書館へ

21号館3階の図書館に現れた 恐竜？ 鳥？

「非鳥類型恐竜」(non-avian dinosaur)。最近この奇妙な用語を、内外の学会で時々聞くようになりました。鳥類を除く恐竜類という意味です。進化系統を重視した分岐分類学の立場に立つと、鳥は恐竜という大きなグループの一部になります。この考えに厳密に従うと、たとえば「恐竜は絶滅した」は間違いで「鳥以外の恐竜は絶滅した」が正しいというわけです。このややこしい事態を避け、今までのようにティラノサウルスやトリケラトプスなどをひとまとめにして呼ぶために便利な用語として「非鳥類型恐竜」が使われています。

背景にはここ30年間に爆発的に増えた恐竜に関する知見があります。鳥と恐竜を関連付けるたくさんの発見があり、かつて「恐竜から鳥類が進化した」という表現であらわした恐竜と鳥の関係を、現在は「鳥は、飛べるようになった恐竜そのものである」と表現することが普通になりました。中生代の終わりに絶滅したのは非鳥類型恐竜たちで、鳥類という恐竜は生き残って現在も繁栄しているというわけです。昔は、特別な料理店でワニ肉を食べて、恐竜はこんな味？と想像したのですが、実は私たちは毎日のようにニワトリという恐竜の肉や卵を食べていることになります。

さて、岡山理科大学は非鳥類型恐竜の中でも特に鳥類に近縁な仲間の骨格標本を数点所有しています。その一つ「パタゴニクス」の組上げ全身骨格標本を21号館3階の図書館の入り口横に展示していただけることになりました(写真)。名前の由来は、発見された南米アルゼンチンのパタゴニアという地名と、爪をあらわすラテン語「ニクス」です。文字通り両手の親指の先に大きな爪がついています。今回展示された標本は今にも走り出しそうな姿勢に復元されていて、図書館を訪れた学生の皆さんからは「かっこいい」と評判です。

ところで、このパタゴニクスが発見されて最初に記載論文が発表された時は非鳥類型恐竜ではなく鳥類に分類されました。発見された骨は全身の2割以下で大変不完全な標本だったのですが、前肢と腰の部分という分類上重要な骨が残っていたので、それらの特徴からアルヴァレスサウルス科であることは突き止められました。当時、アルヴァレスサウルス科の化石は鳥類とするかしないかで議論的でしたが、パタゴニクスを最初に記載研究した人は鳥類とする案を取りました。白亜紀の空を飛んでいた鳥類の一種が地上生活を始め、現在のダチョウのように地上を走り回る方向へ特殊化したのがパタゴニクスだと考えたのです。



写真1：展示されたパタゴニクスの骨格。全長1.6m。

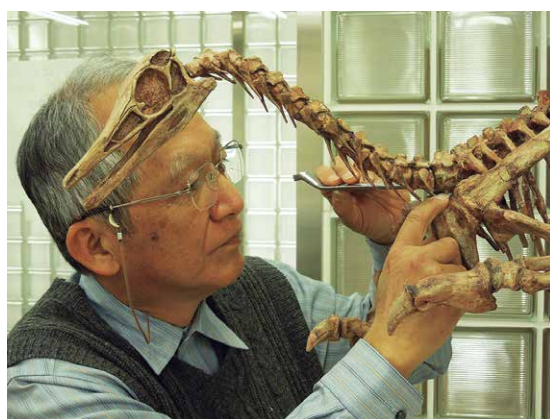


写真2：展示設置風景。頭部を固定しています。手前に見えているのはこの化石の特徴である、手の親指の大きな爪です。

その記載論文が出た翌年の1998年、モンゴルのゴビ砂漠中央部で調査をしていた岡山の林原自然科学博物館とモンゴル科学アカデミーの共同調査隊が長さ50cmぐらいの小さな動物化石を見つけました。ほぼ全身の骨がそろっていました。日本人・モンゴル人・アメリカ人の共同研究チームでこの化石を検討した結果、アルヴァレスサウルス科に属すること、尾の骨が35個以上あること、そして手の指には大きな親指の爪のほかにほとんど機能していない小さな指が2本あることがわかりました。尾の骨が35個以上もあるのは明らかに鳥類ではありません。それでこの標本も、ほかのアルヴァレスサウルス科の動物たちも、すべて鳥類ではなくて非鳥類型恐竜だということになりました。このような学界の動向を受けて、今回の展示の解説パネルは、パタゴニクス記載論文にあった鳥類(Avialae)という項目をはずしています。新しい発見があると以前見つけていた標本の位置付けは変わり、解説パネルも変わると

いう良い例です。

2015年から岡山理科大学とモンゴル科学アカデミーとの共同調査がゴビ砂漠で本格的に始まりました。ゴビ砂漠からは非鳥類型恐竜も鳥類も見つかります。私は調査当事者の一人として、岡山理大一モンゴル共同調査隊が通説を変えるような発見をすることを夢見ています。その時はぜひその成果を岡山理科大学の一角で皆さんに見ていただきたいと思います。